

知的障害養護学校における新設教科「外国語」の実践に関する 一考察：教育課程審議会答申（平成10年7月）の視座から

高畑庄蔵^{*}・高島佳江^{*}・広安敏美^{*}・藤井美紀^{***}・安達勇作

(2001年8月31日受理)

A Study of Foreign Language Education Practices for Schools for Mental Retardation from the Point of View of the 1998 Report of the Curriculum Council

Shozo TAKAHATA^{*}, Yoshie TAKABATAKE^{*}, Toshimi HIROYASU^{*},
Miki FUJII^{***} and Yusaku ADACHI

キーワード：知的障害養護学校，学習指導要領，外国語教育

Key words : schools for mental retardation, the Course of Study, foreign language education

1. はじめに

教育課程審議会は「幼稚園，小学校，中学校，高等学校，盲学校，聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」として平成10年7月29日に答申を行った。教育課程審議会答申（以下，教課審答申とする）は，中央教育審議会の第一次答申，第二次答申（平成8年7月，平成9年7月）「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」で報告された「ゆとりの中で生きる力をはぐくむ」等という基本理念のもとに，教育課程を編成する基準の改善の方向性を示したものである。教課審答申では，教育課程の基準の改善のねらいとして，①豊かな人間性や社会性，国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること，②自ら学び，自ら考える力を育成すること，③ゆとりある教育活動を展開する中で，基礎・基本の確実な定着を図り，個性を生かす教育を充実すること，④各学校が創意工夫を生かし特色のある教育，特色ある学校づくりをすすめることの4点が挙げられている。

「国際社会に生きる日本人の育成」は，改善のねらいの筆頭に挙げられたように，「各学校段階・各教科等を通じる主な課題に関する基本的考え方」においても重要な位置付けとなっている。教課審答申での「国際化への対応」に関わる記述は，次の点に読み取ることができる。一つは，共生社会の実現である。「異文化を理解し偏見を持たずに共に生きていくための資質や能力の育成を図ることをねらいとする」としている。もう一つは，横断的・総合的な学習の充実である。「国際化の進展に対応

した教育は，社会科，地理歴史科，外国語科を中心に各教科，道徳，特別活動の特質等に応じて行うこととされているが，各教科等での教育に加え，『総合的な学習の時間』においても教育の充実を図ることが必要である」としている。なお，国際化の教育を進める留意点として，とかく欧米先進諸国に目を向けがちであったことを改め，アジア諸国等に一層目を向けることの重要性も指摘されている。

また教課審答申では，国際化，情報化の進展等社会の変化に対応し，生徒の日常生活を豊かにするとともに卒業後の社会生活への適応を円滑に進めることができるようにする観点から，知的障害者を教育する養護学校の教科として「外国語」の新設が提言された。

文部省告示第61号（平成11年3月29日）盲学校，聾学校及び養護学校小学部・中学部学習指導要領及び第62号（平成11年3月29日）盲学校，聾学校及び養護学校高等部学習指導要領においては，教課審答申における教育課程の基準の改善への基本的な考え方のもとに，知的障害養護学校の中学部・高等部で選択教科「外国語」が新設された。外国語や外国の文化に対する関心を持ち，国際理解を深めることなどをねらいとし，外国語の内容としては「英語」が示された。中学部での目標は「外国語に親しみ，簡単な表現を通して，外国語や外国への関心を育てる。」，高等部での目標は「外国語でコミュニケーションを図る基礎的な能力や態度を育てるとともに，外国語や外国への関心を深める。」である。合わせて，生徒の障害の程度及び実態の多様化に対応するために，知的障

^{*}富山大学教育学部附属養護学校 ^{***}株式会社 富山育英センター

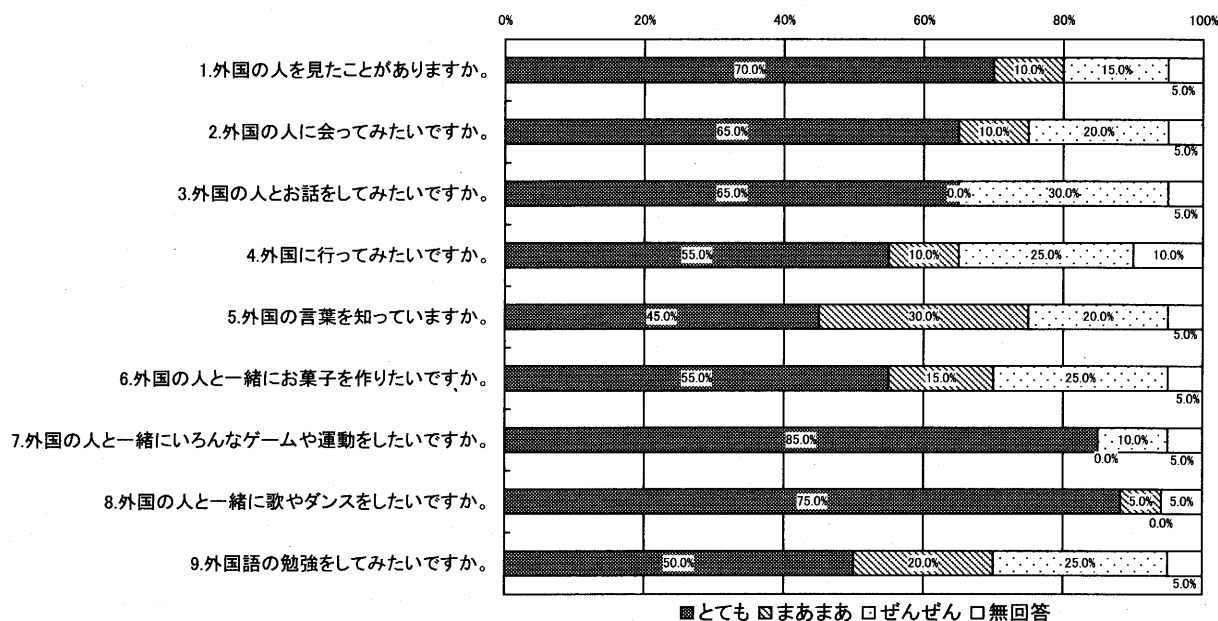


Fig. 1 外国語の学習に関する生徒への事前アンケートの結果

2. 平成11年度 高等部「外国語」の実施計画

上記の事前調査の結果を踏まえ、下記のとおり外国語(英語)の実施計画を作成した。附属養護学校では、大学の附属であるという特長を生かし、富山大学の外国人留学生を招き、3回の交流活動を中心とした外国語(英語)の授業を行った。

1) 目標

外国と日本の文化・生活の違いに関心を持ち、国際理解を深めること、外国人留学生との様々な交流活動を通して親睦を深めること、あいさつなど簡単な外国語(英語)の表現に興味や関心を持つことを目標とした。

2) 指導上の基本的な考え方

実践の展開においては、知的障害生徒の学習上の特性への考慮や、在学中及び卒業後の生活を豊かなものにする観点から、以下の点を指導上の基本的な考えとした。

第1に、外国人留学生との継続的な交流活動を基本とした。大学の附属学校としての利点を生かすべく、富山大学留学生センターとの連携を密にした。まず、留学生担当事務官に事前に附属養護学校を見学してもらい、本校児童生徒や教育の概要について説明した。参加募集のポスターの掲示方法、連絡方法を綿密に打ち合わせをし、留学生の代表と担当事務官との事前協議、オリエンテーションを計画的に行うこととした。

第2に、実際の、体験的な活動の中核にして実践を構成することとした。題材を生徒にとって興味・関心のあるもの、例えば食べ物作り、スポーツ、あいさつなどを取り上げた。生徒を取り巻く生活に密着した題材を取り上げることで、主体的に活動できる環境を構成するよう配慮した。

なお、本実践では、教育課程審議会答申(平成10年7月29日)にあるように、アジア諸国に一層目を向けるこ

とに留意した。富山県は、アジア諸国と深い関係にあり、多くの留学生が富山大学に学んでいる。本実践が契機となって日常的な交流が促進されるよう期待した。

3) 実践の日程

上記の目標、考え方を踏まえ、外国人留学生との交流を中心に、三回の実践を計画した。第1回は、平成11年9月4日(土)、題材「外国の方と仲良くなろう」。第2回は、10月16日(土)、題材「外国の方と有名な食べ物を作ってみよう」。第3回は、12月18日(土)、題材「外国の方ともちつきをしよう」を計画した。

3. 第1回実践：題材名「外国の方と仲良くなろうーキックベースボール大会ー」

1) 日時・参加者

平成11年9月1日(水) 1・2限に事前指導を、4日(土) 1限から3限まで授業、4限に事後指導を行った。参加者は高等部生徒20名、留学生(韓国、中国、台湾、マレーシア、ラオス)6名、教育実習生6名、教員6名であった。

2) 目標

外国人留学生とキックベースボールを通して一緒に汗を流し親睦を深めること、あいさつなど簡単な外国語の表現に興味や関心を持つことを目標とした。

3) 事前指導

①当日の流れ・授業内容の説明：交流当日の流れを模造紙に書いたもので説明した。大型の世界地図を使って日本の位置を確かめたり、来校する留学生の国々の位置を確認した。また、各国の国旗を作成し、国名当てクイズを行った。体育で実施しているキックベースボールのルールを確認した。あいさつや司会等の役割分担を行った。②キックベースボールのグループ分け：国際親善試合として「中国チーム」「韓国・台湾チーム」「ラオス・マ

レーシアチーム」の3チームを編成することとした。それぞれのリーダーを決定した。③あいさつ・自己紹介の練習：チームごとに英語で練習した。教員と教育実習生が2名ずつ加わり、英語で例示した後、一人ずつ発表した。発語が困難な生徒については、カードを使ったり握手したりすること等を練習した。④実践1についての事前アンケート調査を行った。⑤授業の期待などの発表：生徒の気持ちを盛り上げていくように配慮した。

4) 授業の流れ・生徒の活動等 (Fig. 2を参照)

①歓迎のあいさつ：代表の生徒が英語で行った。初めてということもあり、教員が事前にカタカナで作成したものを読み上げた。あいさつが終わると留学生から大きな拍手が起こった。②留学生の自己紹介：大型地図と国旗を使って、一人一人が英語と自国語で自己紹介をした。生徒たちは真剣に聞き入っており、あいさつが終わると生徒から自然に拍手が起こった。留学生は一樣に緊張していたようであった。③各チームの発表。④チーム別に生徒の英語等による自己紹介：英語で名前を紹介した。生徒の中には、中国語や韓国語であいさつする生徒もいた。自国語であいさつされた留学生はとても喜んでた。留学生は一人一人のあいさつに真剣に耳を傾けていた。握手は自然に行われていた。⑤ルールの説明・各チームでの円陣：代表の生徒がルールを説明した。円陣では、肩を組み合って「ファイト！」などのかけ声を出していた。⑥「中国チーム」「韓国・台湾チーム」「ラオス・マレーシアチーム」の3チームに分かれて対戦：各試合は、2イニング総当たり対戦で3試合行われた。教員と教育実習生はそれぞれ2名ずつ参加し、生徒や留学生が戸惑った場合に適宜援助した。キックベースはルールが簡単であり、初めてでもゲームを楽しむことができる特長がある。体育で繰り返し練習している生徒は、見通しを持って活動に参加しており、留学生にルールを教える場面も見られた。ヒットやアウトの場面では、歓声や手を叩きあう場面が多く見られた。応援用の小旗を準備しておいたところ、留学生がリードして生徒と一緒に応援する様子が見られた。⑦結果発表：教師が得点を発表すると、勝利チームでは歓声があがり、生徒と留学生とで抱き合う様

子が見られた。⑧終わりの言葉：代表の生徒が英語で行った。また、作業学習の作品を記念品として一人一人に贈呈した。⑨記念撮影：留学生が生徒に撮影ポーズを教えてくれるなど、和やかに行われた。⑩拍手で留学生を送った。

5) 事後指導

①授業の感想発表：生徒からは、「国際試合は楽しかった。」「また留学生さんに会いたい。」など、積極的な感想があがった。②実践1についての事後アンケートを行った。

なお、家庭への連絡として、写真と短いコメントで構成した通信「外国語かわら版」を配布した。

4. 第2回実践：題材名「外国の方と有名な食べ物を作ってみよう -マレーシアの味・にっぽんの味-」

1) 日時・参加者

平成11年10月13日(水)1限に事前指導を、16日(土)1限から3限に実践、4限に事後指導を行った。参加者は高等部生徒20名、留学生(マレーシア人)6名、学生ボランティア2名、教員6名であった。

2) 目標

日本のおやつ「やきいも」、マレーシアの代表的なおやつ「チュチュピサン」を一緒に作ることで互いの食生活に関心を持つこと、マレーシアの文化に関心を持つこと、あいさつなど簡単な外国語の表現に興味や関心を持つことを目標とした。

3) 事前指導

①当日の流れ・授業内容の説明：全体のあいさつは、代表生徒と一緒に内容を考えた。代表生徒は中学校特殊学級卒業であり、簡単な英語の文章を自分で作成することができた。②あいさつ・自己紹介の練習：生徒によっては、「私は〇〇が好きです。」という練習を加えた。③授業に関する事前アンケート調査。④授業の期待などの発表。

なお、油を使った料理作りをするため、生徒の衛生面や、安全面の指導も十分に行った。また、小学部の授業「やきいもづくり」と連携するために、小学部の授業担



Fig. 2 第1回実践「外国の方と仲良くなろう」の様子

左の写真は、留学生が世界地図で自分の国を紹介している様子。中央の写真は、生徒と留学生が同じチームになって「キックベースボール」を楽しんでいる様子。右の写真は、チームごとに記念撮影。



Fig. 3 第2回実践の通信「マレーシアの味、にっぽんの味」

本通信は、保護者に実践の様子を知らせるために作成した。カラー版の通信を留学生等にも配布して啓発資料として活用した。左上の写真は、留学生が地図や写真でマレーシアの紹介をしている様子。右上の写真は、生徒と留学生が協力して「チュチュピサン」を作っている様子。右下の写真は、感謝の気持ちを生徒が簡単な英語で挨拶している様子。

当者と綿密に協議した。

4) 授業の流れ・生徒の活動等 (Fig. 3を参照)

①調理室の準備：男子生徒は、中庭で小学部と協力しやきいもの準備を行った。女子生徒は、調理室で皿などの準備を行った。②歓迎のあいさつ(生徒代表)。③「やきいも」についての説明：代表の生徒がイラストを使って、日本語でやきいもの作り方を説明した。④マレーシア留学生の自己紹介と国の紹介：代表の留学生の方から、マレーシアの国について説明を受けた。地図や国旗、マレーシアに関する資料を留学生に持参していただいた。⑤料理チームの発表(学年別)。⑥生徒の自己紹介：学年別に、生徒の英語による自己紹介を行った。その際、マレーシア留学生からマレー語のあいさつを教えてもらった。⑦「チュチュピサン」の調理：各学年の調理班に分かれ、留学生の方からマレーシア料理を教えてもらった。Aチーム：1年生、留学生2名、教官2名、Bチーム：2年生、留学生2名、教官2名、学生ボランティア1名、Cチーム：3年生、留学生2名、教官2名、学生ボランティア1名の3チームで活動した。チュチュピサンは、バナナをすり下ろして油であげるという料理であった。教員は、留学生の説明をわかりやすく言い換えて生徒に伝えたり、安全面を配慮しつつ活動に参加した。⑧中庭

に移動：留学生と一緒にやきいもを掘り出した。⑨全員でマレーシア料理とやきいもの試食：小学部の児童も一緒に食べた。高等部の生徒や留学生から、チュチュピサンとやきいもについての感想を発表してもらった。また、高等部生徒と留学生は、食事をしながら互いの家族のことやマレーシアでは人気のある日本のアニメなどの話題で楽しく会話をしていた。さらに、小学部の生徒を膝に乗せてあげている留学生もいた。⑩終わりの言葉：代表の生徒が英語であいさつした。留学生をはじめ、小学部の教員や児童から大きな拍手をもらっていた。⑪記念撮影。⑫拍手で留学生を送った。

5) 事後指導

①授業の感想発表：生徒からは、「マレーシアに行きたい。」「家でチュチュピサンを作ってみる。」など、積極的な感想が聞かれた。②実践2についての事後アンケートを行った。

なお、家庭への連絡として、写真と短いコメントで構成した通信「外国語かわら版」(Fig. 3)を配布した。

5. 第3回実践：題材名「外国の方ともちつきをしよう」

1) 日時・参加者

平成11年12月17日（金）5・6限に事前指導を，18日

(土) 1限から3限に実践、4限に事後指導を行った。参加者は高等部生徒20名、留学生(中国、韓国、台湾、インドネシア等7カ国)14名、学生ボランティア13名、保護者ボランティア2名、教員9名であった。なお、もちつき場面、試食場面に、小学部、中学部の児童生徒全員及び教員が参加した。

2) 目標

多くの国の留学生と一緒にもちつきをすることを通して親睦を深めること、もちつきをすることで自国の食文化について関心を持つこと、あいさつや自己紹介など簡単な外国語の表現に興味や関心を持つことを目標とした。

3) 事前指導

①当日の流れ・授業内容の説明。②英語によるあいさつ・自己紹介の練習。③会場の清掃。④もちつきの準備: 1・3年生はうす・きね・皿などの煮沸・洗浄を、2年生はもち米とぎを行った。⑤明日の授業に関する事前アンケート調査。⑥授業の期待などの発表。

なお、筆頭執筆者は実践3についての目標及び計画を小学部、中学部の教員に連絡し、協力と参加を得ることとした。また、保護者・学生ボランティアを募集し、もちつき活動への協力を得た。

4) 授業の流れ・生徒の活動等 (Fig. 4を参照)

①会場の準備: 体育館の掃除、シート、皿などを協力して準備する。②英語での歓迎のあいさつ(生徒代表)。③もちつきの紹介: 代表の生徒が日本でのもちつきの習慣について日本語で説明した。④留学生の自己紹介: 大型地図で自国の場所を指してもらい、英語と自国語であいさつしてもらった。⑤もちつきチームの発表: AからCの3チームに分かれた。高等部の教員が3名ずつチームに所属した。⑥生徒の英語等による自己紹介: 時間がなくなってきたため、生徒からの一方的なあいさつとなった。⑦もちつき: A→B→Cチームの順にもちつきを行った。臼が一つしかなかったため、一人がついている様子をみんなで見学するという状態であった。留学生が杵を振り下ろすと、「よいしょ。よいしょ。」というかけ声が周囲から起こった。留学生が一とおりもちをつきおわり、特別参加した小学部児童や中学部生徒が杵を持つと、時間の都合で高等部生徒全員がもちをつくことができなかった。

た。女子の留学生が、つきあがったもちに大根おろしやあんこ等をまぶす活動に自ら参加した。高等部生徒や学生・保護者ボランティアと一緒に活動であった。⑧会食: チームごとにつきたてのもちを食べた。小学部と中学部の生徒も参加し、大人数での会食となった。後片付けの予定もあるため、会話の時間が十分とれなかった。⑨終わりの言葉: 代表の生徒が英語で行った。小学部・中学部の児童生徒からも大きな拍手が送られた。⑩記念撮影: 時間の都合で中止となった。⑪拍手で留学生を送った。

5) 事後指導

①授業の感想発表: 生徒からは、「楽しかった。」「またやりたい。」という感想があった反面、「もちつきができなかった。」など、消極的な感想も出された。②実践3についての事後アンケートを行った。

なお、家庭への連絡として、写真と短いコメントで構成した通信「外国語かわら版」を配布した。

III. 実践に関するアンケートの方法及び結果

生徒及び実践に参加した外国人留学生を対象に、実践2・3について事前・事後アンケートを実施した。以下に方法と結果について述べる。

1. 第2回実践: 題材名「外国の方と有名な食べ物を作ってみようーマレーシアの味・にっぽんの味ー」についての生徒へのアンケート

1) 事前調査の方法

調査対象は、本授業に参加した附属養護学校高等部に所属する生徒20名であった。

調査内容は、Table 2に示したとおり、4項目について事前と事後で構成した。学習への意欲、マレーシアの留学生との親睦の程度、会話への意欲、料理への興味・関心について構成した。各項目について、「○=とても」、「△=まあまあ」、「×=ぜんぜん」という3段階での評価であった。

調査方法は、事前・事後学習において、筆頭執筆者が一問ずつ読み上げ、生徒がアンケート用紙に評価した。なお、文字や言葉での理解・表現が難しい生徒について

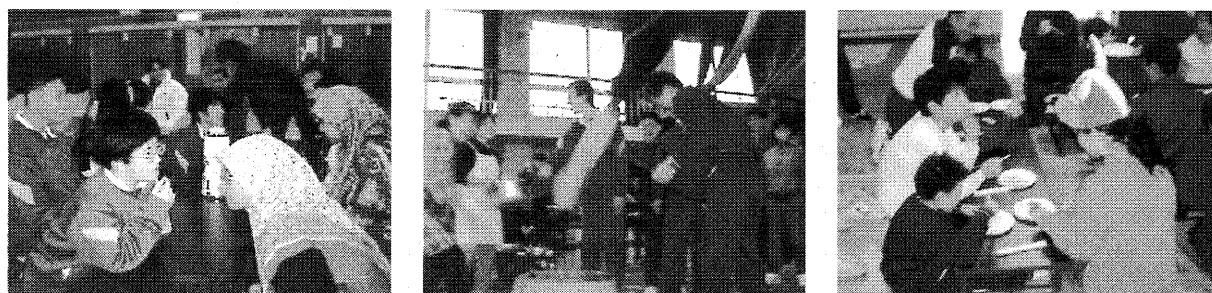


Fig. 4 第3回実践「もちつき大会」の様子

左の写真は、留学生と生徒が自己紹介し合っている様子。中央の写真は、生徒と留学生が協力してもちつきを行っている様子。保護者ボランティアの協力を得た。右の写真は、一緒についたもちを食べている様子。

Table 2 第2回実践：生徒・留学生へのアンケート調査項目

生徒	
事前調査	
項目1.	マレーシア料理の勉強は楽しみですか
項目2.	マレーシアの人と会うのは、楽しみですか
項目3.	マレーシアの人とお話をしたいですか
項目4.	マレーシアの人と一緒に料理をしたいですか
事後調査	
項目1.	マレーシア料理の勉強は楽しかったですか
項目2.	またマレーシアの人と会いたいですか
項目3.	またマレーシアの人とお話をしたいですか
項目4.	またマレーシアの人と一緒に料理をしたいですか
留学生	
事前調査	
項目1.	学校へ来るときに不安はありましたか
項目2.	期待はしていましたか
項目3.	今日の料理は楽しみですか
項目4.	生徒たちと一緒にいろんな活動をしてみたいです
項目5.	これまでボランティア活動をしたことがありますか
事後調査	
項目1.	今日は楽しかったですか
項目2.	また学校に来てみたいです
項目3.	今日の料理は楽しかったですか
項目4.	また生徒たちと一緒に遊んでみたいです
項目5.	次回はどのようなことをしてみたいですか

は、個別に教員がつき、ジェスチャー等でわかりやすく例示しながら評価を援助した。

2) 調査結果

3段階による評価を、各項目ごとに「とても」、「まあまあ」、「ぜんぜん」として、事前と事後を併記してFig. 5に示した。なお1名については正確な評価ができなかったため19名で算出した。項目1（マレーシア料理の勉強は楽しい。）については、「とても」が事前：68.4%から事後：89.5%と上昇した。項目2（マレーシアの人に会いたい。）については、「とても」が事前：84.2%から事後：63.1%に減少した。加えて、「ぜんぜん」が事前：0.0%から事後：5.3%に上昇した。項目3（マレーシアの人と話をしたい。）については「とても」が事前：68.4%から事後：84.2%に上昇した。項目4（マレーシアの人と料理をしたい。）については「とても」が事前：73.7%から事後：78.9%へと若干上昇した。

2. 第2回実践についての外国人留学生へのアンケート

1) 事前調査の方法

調査対象は、本授業に参加したマレーシア人留学生6名であった。

調査内容は、Table 2に示したとおり、事前には養護学校へ来ることへの不安や生徒たちとの活動への期待な

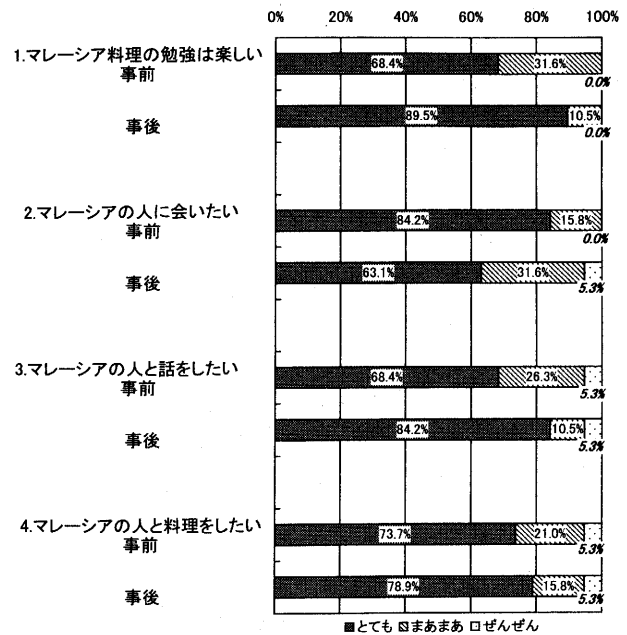


Fig. 5 第2回実践：生徒へのアンケートの事前事後比較

Table 3 第3回実践：生徒・留学生へのアンケート調査項目

生徒	
事前調査	
項目1.	もちつき大会の勉強は、楽しみですか
項目2.	外国の人と会うのは楽しみですか
項目3.	外国の人とお話をしたいですか
項目4.	外国の人と一緒に、もちつきをしたいですか
事後調査	
項目1.	もちつき大会の勉強は、楽しかったですか
項目2.	また外国の人と会いたいですか
項目3.	また外国の人とお話をしたいですか
項目4.	また外国の人と一緒にもちつきをしたいですか
留学生	
事前調査	
項目1.	これまで附属養護学校にボランティアとして来たことがありますか
項目2.	学校へ来るときに不安はありましたか
項目3.	もちつきを知っていますか
項目4.	生徒たちと会話してみたいですか
項目5.	どのようなことをしてみたいですか
事後調査	
項目1.	今日は楽しかったですか
項目2.	もちつきは楽しかったですか
項目3.	生徒たちと会話することができましたか
項目4.	また生徒たちと一緒に遊んでみたいです
項目5.	意見や希望があったら教えてください
今後希望する交流内容	
項目1.	スポーツ
項目2.	料理
項目3.	歌
項目4.	自己紹介
項目5.	日本の慣習
項目6.	その他

どの5項目、事後には活動の感想や今後の参加への意欲など4項目で構成した。各項目について、①とてもは「〇〇」、②まあまあは「〇」、③ふつうは「△」、④あまりは「×」、⑤全くは「××」という5段階での評価であった。

調査方法は、事前・事後のオリエンテーションにおいて、筆頭執筆者もしくは学生ボランティアが付き添い、留学生の質問に日本語や英語で説明し援助した。

2) 調査結果

富山大学マレーシア人留学生6名による5段階の評価を、各項目ごとに①とてもは「++」、② まあまあは「+」、③ふつうは「±」、④あまりは「-」、⑤全くは「--」として、Fig. 6に示した。

事前調査の項目1（学校へ来るとき不安はありましたか。）では、「++」「+」を合わせて66.7%であった。なお、項目1は反転して示した。項目2（期待はしていましたか。）については、「++」「+」を合わせて83.3%であった。項目3（今日の料理は楽しかったですか。）、項目4（生徒たちと一緒にいろんな活動をしてみたいですか。）については、「++」「+」を合わせて100.0%であり、項目5（これまでボランティア活動をしたことがありますか。）では83.4%であった。

事後調査では、全ての項目について「++」が100.0%であった。

3. 第3回実践：題材名「外国の方ともちつきをしよう」についての生徒へのアンケート

1) 事前調査の方法

調査対象は、本授業に参加した附属養護学校高等部に

所属する生徒20名であった。

調査内容は、Table 3に示したとおり、4項目について事前と事後で構成した。学習への意欲、外国人留学生との親睦の程度、会話への意欲、もちつき活動への興味・関心について構成した。各項目について、「〇=とても」、「△=まあまあ」、「×=ぜんぜん」という3段階での評価であった。調査方法は、実践2の場合と同様とした。

2) 調査結果

3段階による評価結果を、各項目ごとに「とても」、「まあまあ」、「ぜんぜん」として、事前と事後を併記してFig. 7に示した。なお1名については正確な評価ができなかったため19名で算出した。項目1（もちつき大会の勉強は楽しい。）については、「とても」が事前：85.0%から事後：84.2%へとほぼ横ばいであり、「ぜんぜん」が事前：0.0%から事後：5.3%に上昇した。項目2（外国の人に会いたい。）については、「とても」が事前：80.0%から事後：79.0%とほぼ横ばいであり、「ぜんぜん」が事前：0.0%から事後：10.5%に上昇した。項目3（外国の人と話をしたい。）については「とても」が事前：85.0%から事後：68.5%に減少し、「ぜんぜん」が事前：0.0%から事後：10.5%に上昇した。項目4（外国の人ともちつきをしたい。）については「とても」が事前：95.0%から事後：73.7%に減少し、「ぜんぜん」が事前：5.3%から事後：10.5%に上昇した。

4. 第3回実践についての外国人留学生へのアンケート

1) 事前調査の方法

調査対象は、本授業に参加した外国人留学生14名であった。

調査内容は、Table 3に示したとおり、事前には養護学校へ来ることへの不安や生徒たちとの会話への期待の2項目、事後には活動の感想や今後の参加への意欲、今後期待する活動内容など5項目で構成した。各項目について、①とてもは「〇〇」、②まあまあは「〇」、③ふつうは「△」、④あまりは「×」、⑤全くは「××」という5段階での評価であった。項目5として、留学生が今後希望する交流の活動内容について、複数選択で聞いた。選択肢は「スポーツ」「料理」「歌」「自己紹介」「日本の慣習」「その他」であった。なお、実際に使用したアンケート用紙は資料2として示した。調査方法は、第2回実践と同様であった。

2) 調査結果

外国人留学生14名による5段階の評価を、各項目ごとに①とてもは「++」、② まあまあは「+」、③ふつうは「±」、④あまりは「-」、⑤全くは「--」として、Fig. 8に示した。

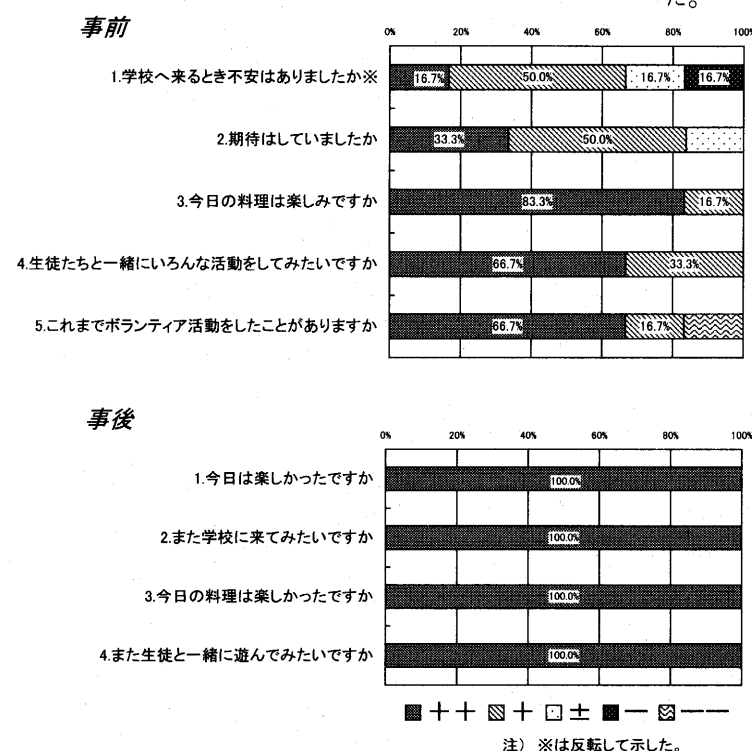


Fig. 6 第2回実践：留学生への事前・事後アンケートの結果

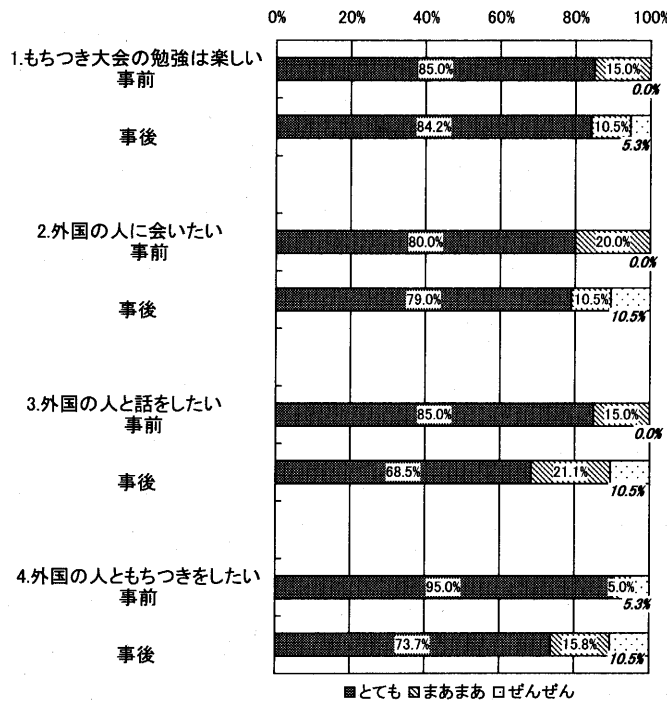


Fig. 7 第3回実践：
生徒へのアンケートの事前事後比較

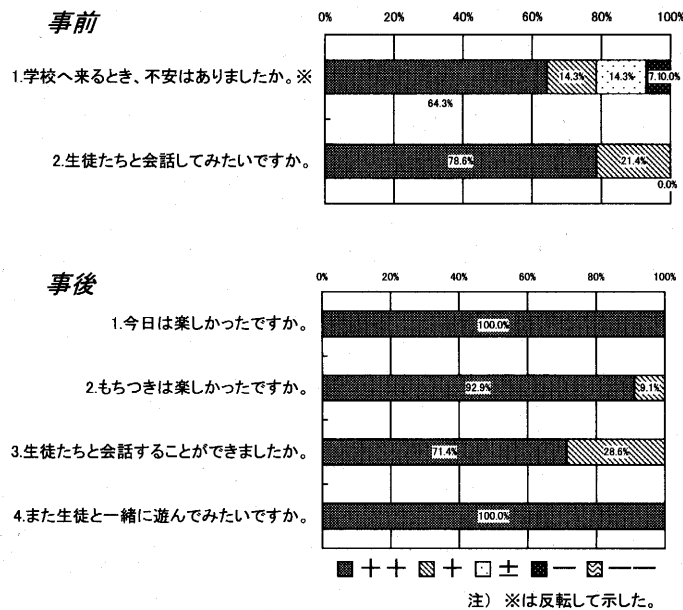


Fig. 8 第2回実践：
留学生への事前・事後アンケートの結果

事前調査の項目1（学校へ来るとき不安はありましたか。）では、「++」が64.3%、「+」が14.3%で合わせて66.7%であった。なお、項目1は反転して示した。項目2（生徒たちと会話をしてみたいですか。）については、「++」が78.6%、「+」21.4%で合わせて100.0%であった。

事後調査については、項目1（今日は楽しかったですか。）で、「++」が100.0%であった。項目2（もちつきは楽しかったですか。）では、「++」が

92.9%、「+」が9.1%で合わせて100.0%であった。項目3（生徒たちと会話することができましたか。）では、「++」が71.4%、「+」が28.6%で合わせて100.0%であった。項目4（また生徒と一緒に遊んでみたいですか。）では、「++」が100.0%であった。Fig. 9には、留学生が今後希望する活動内容についてまとめた。「スポーツ」が22.6%、「料理」が25.8%、「歌」が19.3%、「自己紹介」が6.5%、「日本の慣習」が22.6%、「その他」が3.2%であった。

IV. 考 察

1. 実践についての検討

平成11年度に附属養護学校において試行的に外国語の実践を行った。以下に、実践と生徒及び留学生へのアンケート結果を踏まえ、実践の目標、題材及び活動内容、方法及び教育課程での位置付けの観点から検討を試みたい。

1) 目標について

本実践では、生徒と外国人留学生とが具体的な活動を共有することを通して親睦を深めること、外国の食文化に興味を持つこと、簡単な外国語の表現に関心を持つことを目標とした。それぞれの目標については、生徒へのアンケートの結果から概ね肯定的な評価を得たものと考えられる。簡単な外国語の表現については、実際に交流を進めるに従って、「話したい」動機が高まっているものと予想されたが、実践2には事前に比べて事後に高く評価されたにもかかわらず、実践3では若干低く評価された。この結果の要因として次の点が推測された。まず第1に、実際の活動場面の様子を見ると、実践2では小集団での活動であり留学生と生徒との会話場面が多く、実践3では大勢での「もちつき」ということもあり実践2に比べて会話場面が多く確保できていなかった。第2に、実際に一緒に活動したり話したりする経験がまだ十分ではなく、活動する機会が提供されただけで

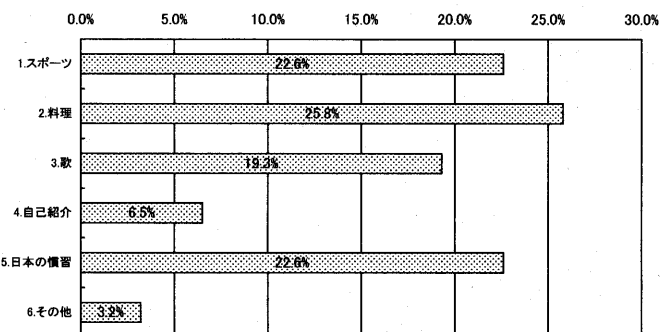


Fig. 9 留学生が希望する交流内容

もちつき大会アンケート

平成11年12月17. 18日

年 名前()

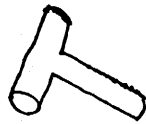
授業の前 (じゅぎょうのまえ)

1. もちつき大会の勉強は、楽しかったですか？
☐ とても ☐ まあまあ ☐ ぜんぜん
2. がいいこくの人とあうのは、楽しかったですか？
☐ とても ☐ まあまあ ☐ ぜんぜん
3. がいいこくの人と、おはなしをしたいと思いますか？
☐ とても ☐ まあまあ ☐ ぜんぜん
4. がいいこくの人といっしょに、もちつきをしたいと思いますか？
☐ とても ☐ まあまあ ☐ ぜんぜん



授業の後 (じゅぎょうのあと)

1. もちつき大会の勉強は、楽しかったですか？
☐ とても ☐ まあまあ ☐ ぜんぜん
2. また、がいいこくの人とあいたいと思いますか？
☐ とても ☐ まあまあ ☐ ぜんぜん
3. また、がいいこくの人と、おはなしをしたいと思いますか？
☐ とても ☐ まあまあ ☐ ぜんぜん
4. また、がいいこくの人といっしょに、もちつきをしたいと思いますか？
☐ とても ☐ まあまあ ☐ ぜんぜん



資料1 生徒へのアンケート調査用紙：第3回もちつき大会

留学生さんへのアンケート

事前 Before

- 1) がっさくへくるときに、不安 (ふあん、anxiety) はありましたか？
☐ No, never ☐ Probably not ☐ Don't know ☐ Probably ☐ Yes, definitely
- 2) 期待は (きたい、expectation) はしていましたか？
☐ No, never ☐ Probably not ☐ Don't know ☐ Probably ☐ Yes, definitely
- 3) きょうの料理教室 (cooking) はのしみですか？
☐ No, never ☐ Probably not ☐ Don't know ☐ Probably ☐ Yes, definitely
- 4) 生徒 (せいと、students) たちといっしょに、いろんなことをしてみたいですか？
☐ No, never ☐ Probably not ☐ Don't know ☐ Probably ☐ Yes, definitely
- 5) これまでボランティア活動 (volunteerism) をしたことがありますか？
☐ No, never ☐ Probably not ☐ Don't know ☐ Probably ☐ Yes, definitely

事後 After

- 1) きょうはのしかなかったですか？
☐ No, never ☐ Probably not ☐ Don't know ☐ Probably ☐ Yes, definitely
- 2) またがっさくこうにきたみたいですか？
☐ No, never ☐ Probably not ☐ Don't know ☐ Probably ☐ Yes, definitely
- 3) きょうのマレーシア料理教室 (cooking) はのしかなかったですか？
☐ No, never ☐ Probably not ☐ Don't know ☐ Probably ☐ Yes, definitely
- 4) また生徒 (せいと、students) といっしょにあそんでみたいですか？
☐ No, never ☐ Probably not ☐ Don't know ☐ Probably ☐ Yes, definitely
- 5) 次回はどのようなことをしてみたいですか？ やってみたいとおもうものを○で囲んでください (複数回答可)。
 a. スポーツ (sports) <例：野球 baseball, バドミントン badminton>
 b. 料理教室 (cooking)
 c. 歌を歌う (singing)
 d. 自己紹介 (self-introduction)
 e. 日本の慣習 (Japanese traditional events) <例：おりがみ、もちつき>
 f. その他 (If you have any good ideas, please tell us)

<ご協力ありがとうございます Thank you for your help>

資料2 留学生へのアンケート調査用紙：第2回マレーシアの味、にっぽんの味

は対応できなかった。第3に、中学校特殊学級で英語の授業を受けていた軽度の知的障害のある生徒にとって、事前指導で行われた簡単なあいさつなどの外国語の表現の指導では不充分であった等である。

附属養護学校高等部は、全国の知的障害養護学校同様、障害の程度が重度から軽度まで多様化する傾向にある。教課審答申では、高等部の必須科目の内容については、生徒の実態が多様化しつつあることから、基礎的な内容と発展的な内容の二段階に分けて示すこととしている。野口(2000)は、高等部での外国語の実践を通して、書いたり読んだりすることよりも聞いたり話したりすることが外国語を好きになるポイントであると指摘した。また野口(1999)は、自らの実践の成果として知的障害のある生徒が英語への興味や関心を高め、夏休み等に家族で海外に出かけた際に英語を話す機会を持てた生徒もいたことを挙げた。このような先進的な取り組みに学びながら、附属養護学校においても選択教科である外国語についても生徒の学習意欲を高め、生活に根ざした目標を設定することを中核にしながら、障害の程度に応じた目標設定が必要になるとと思われる。

2) 題材及び活動内容について

題材としては、食べ物作りやゲームなど、一緒に身体を使って活動できるものが有効であったと思われる。生徒への事前調査からは、料理や運動等の活動には積極的な姿勢が確認された。また、取り上げた題材については、生徒、留学生とも高い評価を示した。高階(1996)は、国際理解教育の留意点として、身近なきっかけを生かす、楽しく学ぶ学習活動、自然な触れ合いを大切にする学習活動を挙げている。また知的障害の学習特性等から、吉田(1999)は生活に即した内容を取り上げ、実際の生活の中で具体的な活動を通して指導する重要性を指摘している。さらに山下(2000)は、抽象的な内容より、実際の・具体的な内容について可能な限り実際の生活の場で、その場に即して指導し、それらを日常生活に生かせるようにすることが大切であることを挙げている。知的障害養護学校の学習指導要領の各教科の目標や内容には、一貫して「生活」というキーワードが記述されている。障害が重度化・多様化する傾向の知的障害養護学校であっても、高階らが指摘する留意点等を踏まえながら生徒が主体的に取り組みやすく日常生活に密着し、生徒の実態に応じた題材を工夫するならば、同時に留学生への活動意欲も促進することとなり充実した実践が可能のように思われる。

3) 方法及び教育課程の位置付けについて

まず第1に、小集団での活動が密接な交流を促進するものと思われる。先述した目標でも指摘したとおり、生徒へのアンケート結果では会話への意欲・関心について、実践2では事後に高く評価されているものの、実践3では事後に若干低く評価された。留学生についての結果も同様の傾向を示した。実践3の「もちつき」のような大

勢で単一の活動では、生徒と留学生が接する機会が乏しくなること、準備等が大変なために教師の配慮が不充分になること等が要因として指摘される。参加人数や準備等を工夫・調整し、より交流が促進される学習環境の整備の必要性が指摘されよう。第2に、多様な障害の特性を考慮しながら、継続的な指導や外国人との交流が必要であると思われる。野口(1999)は、自らの実践の課題として、週1時間の取り組みではそのときだけの理解にとどまる傾向があった点を挙げている。知的障害のある生徒が学習の成果を生活の場面に生かすまでには、より時間をかけた継続的で長期的な指導が必要となってくる。本実践のようなトピック的なものではなく、日課表に位置付けた継続的な指導と非常勤講師としてのALTの確保が必要と思われる。第3に、日常場面で学習成果が役立つように総合的・横断的な学習が必要であると思われる。山田(2000)は、身の回りのものやあいさつ文、応答文を絵と文字で画用紙に一枚ずつ書き、目に触れるところにおいていつでも取り出して楽しみながら学習できるとよいと提案している。可能な限り実際の生活の場で、その場に即して指導し、それらを日常生活に生かせるようにするという、障害の特性を踏まえた重要な指摘である。外国語の授業を核としながら、学習の成果を生かす日常的な指導の配慮に加えて、成果を応用する機会として本実践に示したような留学生との交流活動を総合的・横断的に位置付けることが有効であると思われる。

2. 教課審答申と知的障害養護学校の外国語教育

1) 答申に見る「外国語」新設の背景

教課審答申では、教育課程の基準の改善に当たっての基本的な考え方として、「社会の変化に柔軟に対応し得る人間の育成」を強調し、また教育課程の基準の改善のねらいとして、「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」、さらに各学校段階・各教科等を通じる主な課題に関する基本的考え方として「国際化への対応」を重要な観点として提示している。小学校においても国際理解教育の一環として外国語が取り扱うことができるようになった。

知的障害養護学校においても、これらの理念は反映された。社会の変化や児童生徒の実態の多様化等に応じた指導をより適切かつ効果的に進める観点から各教科の内容に大胆な見直しが行われた。具体的には、中学部「職業・家庭」は「産業現場等における実習」に、高等部「家政」では内容の例示として「保育、家庭看護、介護」、職業教育に関する教科として「流通・サービス」を加えるなどの改訂を行った。そして選択教科として、中学部と高等部に「外国語」を、高等部に「情報」が新たに設けられた。

社会はめまぐるしく変化している。国際化の進展に伴い、外国人と触れ合う機会や日常生活の様々な場面で英語が用いられることが多くなってきたと指摘されるように(例えば、全国知的障害養護学校長会、1999)、家族

や福祉団体をベースに展開する交流の動きは確実に増えつつある。ここ富山県においても既に2回、知的障害者本人による活動グループ「みんなの青年の会」では、アメリカ合衆国ハワイ州のヘレマノプランテーションにおいて、日米の知的障害者同士の交流活動等を実現している（富山市育成会，1999）。筆頭執筆者もこの会に参加しているが、知的障害のある人にとっての国際化の動きは強まっており、否応なしに異文化との共生が迫られるようになってきている。教課審答申が指摘するとおり、国際化、情報化の進展等社会の変化に対応し、生徒の日常生活を豊かにするとともに、卒業後の社会生活への適応を円滑に進めることができるようにする観点での外国語教育の進展がさらに強調されよう。

2) 共生社会の実現

教課審答申では、「国際化への対応」の中で、「国際化の進展に対応した教育は、広い視野を持って異文化を理解し、異なる文化や習慣をもった人々と偏見をもたずに自然に交流し共に生きていくための資質や能力の育成を図ることをねらいとするものである」としている。いわゆる「共生社会」の実現をめざすものと解釈できよう。佐藤・林（1998）は、「共に生きる」ことを実現するには、異なった文化をもつ人々と身近な生活レベルで交流していくことが重要であり、単なる知識理解ではなく共感的理解が伴うような体験学習や交流学习が不可欠であるとしている。本稿で報告した実践では、实际的で体験的な活動を通して学習を進めた。生徒及び留学生のアンケート結果は、佐藤・林が言う共感的理解の実現の必要性を傍証したものであると思われる。

また教課審答申では、「共に生きる」ことを国際化への対応の文脈で記述しているが、このことは近年のノーマライゼーションやインクルージョンの思想と基本的には共通するものであると思われる。知的障害養護学校での外国語の新設は、「共生社会」というキーワードに基づいて、「異文化理解」と「障害者理解」との統合が実現する方向性を持つものと期待される。さらに教課審答申では、これまでとかく欧米先進諸国に目を向けがちであったことを改め、アジア諸国等に一層目を向けるよう留意することが大切であると指摘している。本稿で示した実践はこの指摘を踏まえたものであったと言えよう。

3) 生きる力の育成

教課審答申では、教育課程の基準の改善に当たっての基本的な考え方として、「生きる力」の育成を強調している。具体的な説明の一部に、「学校で学習した知識・技能や学び方などは、家庭や地域社会において生きて働く力として用いられることによって一層深められ、根付いていく」と説明している。知的障害養護学校では児童生徒の障害の状態等に応じた適切な教育を行えるよう教育課程編成の特例が定められている。新学習指導要領では、高等部の必須科目の内容については、生徒の実態が多様化しつつあることから、基礎的な内容と発展的な内容の

2段階に分けて示したこと、家庭等との連携を図り学習した成果を実際の生活に生かすことができるように配慮することなどを示した。

重度・多様化に対応するには、障害の特性を踏まえた適切な教育が展開される必要がある。特に中・重度知的障害や自閉性障害のある児童生徒は、ある場面で学習したことを日常場面で直ちに活用され、長期に維持することが困難であることが内外の研究から明らかとなっている（例えば、Koegel & Koegel, 1988；志賀，1991）。知的障害のある児童生徒の教育には、「生活に根ざす」ことが既にキーワードとなっているが、外国語での学習の成果を「生きる力」として機能させるためには、生徒本人が生活の中で自ら主体的に活用することを援助する具体的な方略が必要に思われる。例えば高畑・武蔵（2000）や武蔵・高畑（1996）は、学校で学習した成果を家庭や地域で機能させる方略として「支援ツール」を提案している。支援ツールとは、視覚的なプロンプトや補助具を活用して自分の行動の実施を容易にする手がかりとして働くものと、自分の行動を自己管理・記録して本人と周囲の人との間でその行動を認め合う関係の構築するものとで構成される。支援ツールのような方略を知的障害養護学校の外国語で積極的に実践することによって、学校で習得した内容が家庭や地域生活で「生きる力」として機能するものとなることが期待される。

V. 今後の実践の方向性

本稿を通して、知的障害養護学校で外国語教育を展開するための具体的な課題を提案することを試みた。しかし本当の課題は、本稿の課題をどのように受け止め、どのように実践を進めていくかという具体的な取り組みである。以下にその概要を記述する。

1. 指導上の基本的な考え方

附属養護学校高等部では現在、本稿で示した試行的実践を通して明確化された課題等を踏まえ、「外国語」の実践に取り組んでいる。外国と日本の文化・生活の違い（水越，1995）に関心を持って国際理解を深めること、外国人との様々な交流活動を通して親睦を深めること、あいさつなど簡単な外国語の表現に興味や関心を持つことが目的である。また実際の授業展開においては、知的障害生徒の学習上の特性への考慮（例えば、山下，2000）、在学中及び卒業後の生活を豊かなものにする観点から次の点を指導上の基本的な考えとした。第1に、教育課程に教科別の指導として「外国語」を位置付け、継続的な指導の実現をめざした。第2に、学習の題材を生徒にとって興味・関心のあるもの、生活に密着したものとするのであった。第3に、簡単なあいさつ等の外国語の表現力を高めるために、ALTを定期的・継続的に招聘し学習の効率・定着化をはかった。第4に、「支援ツール（例えば、富山大学教育学部附属養護学校，2001）」を積



Fig.10 外国語で導入・活用する「支援ツール」の一例

左の写真は、支援ツール「外国語お助けブック」である。会話や活動で使用する単語が参照できるようになっている。中央の写真は、「外国語お助けブック」にはさむカードの一例である。右の写真は、支援ツール「ヘルプカード」である。言葉でうまく表現できない生徒が活動中に的確に意思表示するために使用するプラカードである。



Fig.11 平成13年度実践「ALTとマフィンを作ろう」の様子

左の写真は、マフィン作りの手がかりとなる「支援ツール」である。めくり式のカード形式となっている。中央の写真は、一緒に作ったマフィンを食べている様子。右の写真は、授業で学習した挨拶“See you again”を使っている様子。

極的に導入し、授業で学習した成果を生活の様々な場面で横断的・総合的に活用できるよう援助した。第5に、日課表に位置付けられた「外国語」の授業を基礎に、本稿で示した試行的な富山大学外国人留学生との交流実践を行い授業で学習した成果を応用・活用する場面として位置付けた。

2. 平成12年度以降の附属養護学校高等部における外国語教育

1) 年間計画の概要

平成12年度4月から外国語を教科別の指導として設定し、ALT（外国人語学指導助手）を招聘し、授業を行っている。なお、「外国語」「情報」の2教科から生徒と保護者との希望による選択制とした。13年度からは、生徒10名が外国語を選択し、授業を行っている。ALTが非常勤講師として位置付けられ、教育実習期間以外は週2時間来て授業に参加している。

ねらいは、生きた英語や英語圏の文化に触れ親しむこと、外国と日本の文化・生活の違いに関心を持ち、国際理解を深めること、あいさつなど簡単な外国語（英語）

の表現に興味や関心を持つとともに、生徒によっては必要な場面で使うことができることとした。

指導上の基本的な考え方では、まず第1に、生徒とALTの対話やコミュニケーションを授業の中核とした。事前に毎回、ALTと綿密に打ち合わせを行った。第2に、实际的、体験的な活動を盛り込み、生徒たちが楽しんで授業に参加できるように工夫した。例えば、ALTとゲームをしたり、歌を歌ったりして英単語の発音や意味を知るための活動、ALTとあいさつをしたり、質問をしたりして基本的な会話をする活動、外国の料理を一緒に作るなど、外国の食文化に親しむ活動などである。第3に、生徒たちの学習理解を促進し、日常的生活場面での外国語の活用を可能とするために、いくつかの「支援ツール」を導入・活用した。例えば、Fig. 10に示した外国語お助けブック、授業の活動内容を書いたカード、HELPカードなどである。

2) 実践例：ALTと一緒にマフィンを作ろう (Fig. 11 参照)

①学習の流れ：ALTの先生が料理が得意である

こと、生徒たちも料理が大好きであることから、ALTの母国(イタリア)の代表のお菓子「マフィン」を一緒に作ることを計画し実施した。料理をする前に、マフィンの材料や道具の英単語を学習したり、写真カードのレシピを見ながらマフィンの作り方を覚えた。

②支援ツールを使った簡単な会話の練習：砂糖、バターなどの実物と英単語カードを見せながら発音やスペルを覚えた。外国語お助けブックに記入・参照することで、いつでも単語を見たり思い出したりすることができた。

③生徒の様子や感想：生徒たちは、意欲的にマフィンの材料などの英単語を覚え、当日はALTの先生とマフィン作りを楽しみ会食をした。誰もが「おいしい」と言い、全員が喜んで食べていた。「また、作りたい」、「家でも作りたい」と話す生徒もいた。ALTの先生がイタリアでの食べ方や作り方、材料などについていろいろ話してくださった。最後にはALTの先生に外国語お助けブックを使って、「See you again」とあいさつした。

3. これからの外国語教育

尾崎・国井(2000)は、日本の国際化が進んで養護学校の生徒も外国人と触れ合う機会が非常に多くなったと指摘しているとおり、これから知的障害者が海外に行く機会が多くなることも予想される。このような時代では、学校教育の段階において外国語や外国に対してのさらなる関心を持つことが求められる。

障害が重度化・多様化する知的障害養護学校での外国語教育の実施は、かなりの困難が予想されよう。しかしながら、生徒の生活を踏まえ、生徒の実態に応じた学習活動を工夫するならば、充実した実践が実現可能になるかもしれない。ノーマライゼーションやインテグレーションの潮流は、共生社会の実現を目指すものである。適切な援助を受けながらも、国際化という社会の変化に対応し、前向きに主体的に生きる力を発揮していく。障害の有無を超え、しかも国籍や文化の違いを超えた真の共生社会を実現するには、さらなる外国語の実践への挑戦が望まれよう。

謝 辞

実践を進めるにあたり協力してくださった富山大学留学生諸君、富山大学教育学部附属養護学校の生徒の皆さん、実践に快くご協力くださった先生方、保護者の方々に深く感謝申し上げます。また、富山大学学生部留学生課長をはじめとする事務の皆さん、留学生との窓口となってくださった山ノ下さん他、関係各位に重ねて感謝申し上げます。

文 献

- 伊藤絵里子・関小田久美子(2000) 楽しい英語教育をめざして. 宮崎直男編著. 改訂学習指導要領で知的障害者への教育はどう変わるか(養護学校編). 明治図書, 112-116.
- 大南英明(1999) 解説「盲学校, 聾学校及び養護学校学習指導要領」. 平成11年3月 文部省告示 盲学校, 聾学校及び養護学校学習指導要領, 時事通信社, 173-211.
- 尾崎祐三(1999) 新しい教科の誕生. 発達の違いと教育, 日本文化科学社, 501, 14-16.
- 尾崎祐三・国井光男(2000) 新しい教科をどのように生かすか. 発達の違いと教育, 日本文化科学社, 513, 22-24.
- Koegel, R.L. and Koegel, L.K. (1988) Generalized responsivity and pivotal behaviors. In Horner, R.H., Dunlap, G. and Koegel, R. L., (Eds) Generalization and maintenance life style change in applied settings. Paul. H. Brookes. 小林重雄・加藤哲文監訳(1992) 自閉症, 知的障害者の社会参加をめざして. 二瓶社, 42-66.
- 教育課程審議会答申(平成10年7月29日) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校, 盲学校, 聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について.
- 佐藤群衛・林 英和(1998) 国際理解教育の授業づくりー総合的な学習をめざしてー. 教育出版.
- 志賀利一(1990) 応用行動分析のもう一つの流れー地域社会に根ざした教育方法. 特殊教育学研究, 28(1), 33-40.
- 全国知的障害養護学校長会(1999) 新しい教育課程と学習活動Q & A 特殊教育<知的障害教育>. 東洋館出版.
- 高畑庄蔵・武蔵博文(2000) 生活技能支援ツールによるなわとび運動の習得過程と家庭での長期的維持の検討. 特殊教育学研究, 37(4), 13-23.
- 高畑庄蔵・藤井美紀・安達勇作(2000) 知的障害養護学校における外国語教育の実態調査. 富山大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 1(通巻17), 77-84.
- 高階玲治(1996) 新しい国際理解教育の展開. 高階玲治編. 小学校・国際理解教育の活動プラン, 明治図書, 7-13.
- 田中博之(1995) 異文化協調を生み出す教育. 水越敏行・田中博之編. 新しい国際理解教育を創造するー子どもがひらく異文化コミュニケーションー, ミネルヴァ書店, 1-10.
- 富山市手をつなぐ育成会(1999) 未来 二十一世紀へー「みんなの青年の会」10周年記念誌ー. 富山市手をつなぐ育成会

- 富山大学教育学部附属養護学校(2001) 個性を生かす支援ツールー知的障害のバリアフリーへの挑戦ー. 明治図書.
- 野口弘子(1999) 外国人英語指導員とのチームティーチングによる指導. 発達の遅れと教育, 日本文化科学社, 503, 27-29.
- 野口弘子(2000) 外国人指導員と会話を楽しむ英語の授業. 宮崎直男編著. 改訂学習指導要領で知的障害者への教育はどう変わるか(養護学校編). 明治図書, 117-122.
- 水越敏行(1995) 国際社会に貢献する学校教育の条件. 水越敏行・田中博之編. 新しい国際理解教育を創造するー子どもがひらく異文化コミュニケーションー, ミネルヴァ書店, 12-23.
- 宮崎直男(2000) 新学習指導要領で知的障害者への教育はどう変わるか. 宮崎直男編著. 改訂学習指導要領で知的障害者への教育はどう変わるか(養護学校編). 明治図書, 10-27.
- 武蔵博文・高畑庄蔵(1996) 知的障害者の地域生活の組織的支援をめざしてー“生活技能支援ツール”を活用した“地域生活支援教室”のあり方ー. 富山大学教育学部紀要A, 50, 33-45.
- 文部省告示第61号(平成11年3月29日) 盲学校, 聾学校及び養護学校小学部・中学部学習指導要領.
- 文部省告示第62号(平成11年3月29日) 盲学校, 聾学校及び養護学校高等部学習指導要領.
- 山田耕一郎(2000) 選択教科を考える. 発達の遅れと教育, 日本文化科学社, 513, 31.
- 山下宏子(2000) 生活にねざした教科別の指導の条件. 発達の遅れと教育, 日本文化科学社, 517, 4-5.
- 吉田昌義(1999) 知的障害養護学校における各教科. 発達の遅れと教育, 日本文化科学社, 503, 8-11.